

2004. 2. 29 「社会の科学集中研究会・府中」にて

事実がよく分からない問題をどう解決していったらいいか

板倉聖宣講演

『メール de 資料』 第92号 2004. 2. 28

● 仮説実験授業と戦争

最近では、戦争の問題が気になっています。

昔、「仮説実験授業の形成 由来と原則」という講演をしたことがあって、そのときは「そもそも仮説実験授業などというものを考えたのはなぜか。それはこの前の戦争のときの教訓からである。ただ、自分はバカであったとかだまされたとかということではいけない。主体的に自分自身でものを考える人間を育てることが科学教育の基本である」と思ったということがありました。そういうことは実はその後さらに、文部省の新教育指針、アメリカ占領軍の指導の元に日本の文部省がまとめた文章に「科学教育の目標の最も重要なこと」として「指導者に誤り導かれないための教育が大事である」ということを見ついたりして、それが仮説実験授業のそもそもの始まりです。

だから今回みたいに日本が戦争に巻き込まれる。すでに巻き込まれたとっていいか、巻き込まれそうだといい方がいいのか、そういう状況なんかはいても立ってもいられないという感じがあって、「そういう事情があるから、戦争の問題は『たのしい授業』で取り上げてもいいだろう」ということで、文章を書き始めています。そのときに、一番大事なのは、ぼくらのような世代の人は特に多いと思うんですが、「また戦争が始まりそうだと」、「憲法で戦争をしないとったのはなんだった

のか」という感じになっております。

そうすると、「自分の意見をはっきり表明する」ということをしなければならぬと思っている人はいるんです。けれども、意見を表明したって、2人の人3人の人4人の人がいれば意見が違ったりして、なかなか意見は変わらないですね。だから、ホットな話題では意見が変わらないのでホットな話題では議論しない方がよろしい。ホットじゃない話題で、次にホットになる話題ならば意見が変わるかもしれない、予想が当たるようにするだろうし、ということで、ホットじゃない話題を取り上げます。

● 「テロとの戦い」は「テロ」との戦いか？

今回出た『たのしい授業』3月号の「グラフで見る社会」にこのグラフ（编者註：いろいろな国でどの政治家がどのくらい信頼されているかをグラフ化したもの）があるわけですが、このグラフは朝日新聞に出た記事が元になっているんですが、朝日新聞の記事はもとの資料の一部しか紹介してないんですね。「一部しか紹介してない」って言ったって、一番面白いところを取り上げているんですから、いいともいえるんですが、実はもし面白い資料があったら元にもどるとというのが原則です。

幸いにして、多久和さんが元にもどってくれました、不思議なことに仮説実験授業はそこら中にスパイ網をめぐらしていて、ほんとに驚いちゃうんですね。多久和さんはインターネットか何かでそういう資料を集めたことがあるものですから、そういう能力を發揮してそれで資料を作ってくれたんですが、せっかく詳しい資料を基にしたのに、多久和さんが初めに作った資料は、朝日新聞の記事に引きずられていて、同じようにつまんない。

それで、これは『たのしい授業』に載せたものですが、こういうものの書けるのは我々仮説のグループだけじゃないかと思います。これは読んでくださった方がいるのも知れませんが、読んでいない方もいるかもしれません、これは調査した国を3つのグループにしたんですね。

これはアメリカの世論調査の会社がやったんですが、これ自身は客観的なデーターです。ビンラディンを支持するアメリカからするととんでもない人々がいるわけですね。「テロとの戦い」とアメリカなんか言ったり小泉首相なんかも言うわけですけど、これを見ると「テロとの戦い」という言葉は同時に「イスラムとの戦い」になってしまっているんですね。だから、「テロとの戦い」なんていえないんですね。今ね。

そしたら、これは確実にテロという一部のごく少ない集団との戦いだったら、終わりがあるけど、イスラム全体が敵だったら終わりがありませんね。イスラム教徒全部を殺すことなんてことはありえないですから。だから黙らせることはできるかもしれないけど、黙らせたら、必ず潜在的になってもっとテロが激しくなる。

だから、こんなにたくさんいる人たちが例えば、インドネシアはイスラムの国だけれども赤十字でイスラムの国ですよ。（編者註：インドネシアは、イスラム教だが赤十字を使っている。十字軍に関係ないかららしい）で、そこでもっとイラクだとかアフガニスタンだったらもっと強いビンラディン志向でしょう。

そういうのはアメリカ兵だったり日本の自衛隊には「できるだけ早くたくさん復興してくれ」というに違いないんです。だけれども、なんか一旦大変なときになったらテロ集団を支持しているんですから、テロ集団を捕まえることはまずできない。そうしたら、それが気持ちよかったりしたらどんどん続いちゃう。

●ベネズエラという国

そういうことでこういうのを出したんですが、実はその後私が知ったことで、ベネチアというのがありますね。ベネズエラ、これは南アメリカの北にある国です。ベネチアと似てますが、これは名前の付け方がベネチアから来るからです。ベネチアというのはベニス。スペイン人がこの辺に行ったときにその湖にある原住民の池の雰囲気そうだったからというんですが、そのベネズエラ。日本より面積が2.5倍だったかな。人口は日本の5分の1ぐらいかな。そこである種のクーデターが起こったと、そういうクーデターが起こったことはぼくは知らなくて、テレビの番組でたまたま知ったんですが、これ、すごく迫力のあるドキュメンタリーの映画です。

これは社会科の知識としては大事なことですが、ベネズエラは世界有数の産油国です。中東が産油国だと思っている人が多いんですが、中東だけでなくアメリカ・ロシア・中国（编者註：世界第一位の産油国はアメリカで、第2位はロシアだそうです）それからサウジアラビア・イラクです。オーペックというのがあるでしょ。産油国の。議長はベネズエラなんですよ。ベネズエラがまとめ役です。

ベネズエラのチャベス大統領というのがいます。チャベス大統領という人はなかなか勇ましく、長い間の経験もあって、知恵もすごくありますね、この人が今大統領です。今大統領というのはいつかは変わっちゃう、ということもかなり気になります。

で、2002年音4月11日にクーデターが起こったんですね。この問題を取り上げて、「事実がよく分からない問題をどう解決していったらいいか」とか、「デマ宣伝に乗らないためにはどうしたらいいか」と、ほとんど全ての人はこの問題を知りませんから。知っていることだと解

釈になっちゃうでしょ。知らないことだったら予想を立てながら知ることができるでしょ。そうすると余り押し付け的にならない。みんなが知っていることについて「私はこう考える」というと「そうじゃない考えもあるじゃないか」ということになります。これは大変教育としては大変使える。今これを学校の教育で使うとちょっと危なっかしいですが、教師集団の間では使える。

●チャベスという人

この国は南アメリカ。南アメリカの国。ぼくはアメリカのことを絶対というほど、アメリカとは書きません。米国と書きます。日本で言うアメリカはほとんど米国のことですね。でも、アメリカにはたくさんの国があって、南米もあるし北米もあるし、で、南アメリカの人はアメリカというと米国になってしまうのが嫌で、ラテンアメリカという呼び方をしたりする。ラ・アと。その国がみんな政情不安定で軍政が続いて、絶えずクーデターをやっていて絶えず物価はすごい上がります。物価指数が1年のうちに10倍になっちゃうなんてことがあります。そういう状況は割合に知る人ぞ知るで。そういうことからすると「南米ってどうしようもない国だなあ」ということなんです。最近やっと落ち着いてきたんですね。

実はチャベスという人は元中佐といわれることがあるんだね。この人もクーデターを起こしたことがあるんです。2回もクーデターを起こして、で、捕まって、刑務所に入っていて、そのときかっこよかったんですね。この人ね、チャベス大統領の前の前の大統領が汚職事件があったんですね。

軍人というのは大体どこの国でも正義の味方ですから、「正義の味方

だからいい」というんじゃないくて「正義の味方だから怖い」ということ
もあって、正義といわれることを猪突猛進してやるのが軍人の仕事です。
だから「軍人というのは悪いやつだ」と思ったりすると大間違いですよ。
その時代にいいといわれていたこと、靖国神社に行くのがいいと思っ
たらなんとしてでも行くというようなね、小泉首相は軍人的な性格がある
わけですね。

で、チャベス元中佐は落下傘部隊で、仲間と固まって、汚職事件の摘
発でクーデターを起こしてつかまって、つかまって負ける寸前に政府側
と交渉したんだな。「もし我々の条件を飲めば我々は降伏する」と、ど
ういう条件かというと「テレビに出せ」と、「テレビでオレに演説させ
ろ」というんで、演説したらすごくカッコよくって「汚職はケシカラン」
という話をしたんです。だから、有名になっちゃった。クーデターの主
宰者が有名になっちゃった。それが根で後で大統領選で勝利するんです。
「我々の国は20%の金持ちと80%の貧乏人がかなりはっきりと別れ
ている」、南米の国はそういう国が多いんですね。だから、その80%
の人に呼びかけちゃったのね。「あの人は本気でやるぞ」という感じで
その次の大統領選で、立候補して勝つんです。圧倒的に強く勝つんです。

●チャベスの改革

1999年にこの人は大統領になる。圧倒的多数です。圧倒的多数だ
から、憲法を変えるんです。本気でやろうと、これだけ圧倒的多数なら
憲法を変えることもできる。大体一連の大改革をやろうというんですか
ら、任期が5年というのは足りない。「任期が5年で再選を妨げる」と
いう選挙の規定ですから、「それではだめだ」というんで、「任期を6

年にして再選は2回まではいい」として、国名も変えるんですよ。だから今、ベネズエラ共和国ではないんです。

ベネズエラなんか共和国、普通ここに昔だったら、社会主義共和国、イスラム共和国があります。じゃあ何でしょう。ボリバルと、活用しますから、ボリバルという人の名前です。ボリバル主義、ボリバルという人が昔いて、ヨーロッパのナポレオンみたいな人です。ナポレオンというのはなかなか悪口を言われることもあるけど、大体英雄でしょ。南米におけるナポレオンです。ボリバルという人はベネズエラの生まれで、今ボリバル共和国というのがありますね。この人の名前を取ったんです。南米をスペインから独立させ、南米共和国を作ると、南米全体で共和国を作るという志の高い。結局最後には敗れてしまうんだけど、この人はすごく尊敬されていて、ボリバル主義という形でベネズエラボリバル主義共和国という名前になっています。

かなり激しい改革をする。これは産油国ですから、お金はうまく石油の利益を配分できれば、貧乏人も勉強ができるし、生活も豊になるというんで、前のずっと前の大統領が石油を国有化しているんですね。石油を国有化しているのに、骨抜きになって、実際には総裁なんか大統領が任命する形なのに大統領が任命できない。石油の国有化を実質的にするという形で動いて、それで動き出したら、そうしたらこの石油公団なんかの総裁なんか危機感を感じるでしょ。これを20%の人がほとんどを握っているんですから。そして争いが激しくなるでしょ。

アメリカはなかなかデリケートなんですよ。アメリカの石油にはかなりこのベネズエラの石油が行っているんです。これがいなくなると大変でしょ。だからベネズエラを怒らせても困るしね。だから「困るなあ」という状況、だから「内々に、チャベス大統領を失脚させる」という形

になるんですね。それで、クーデターが起きた、これは新しい時代のクーデターというか、新しい時代の社会、これからの社会が見えるなあと、思って、そういう点で社会科教育として少なくとも教師は知っていた方がいい。大衆動員をかけてクーデターです。そういうタイプのヤツはフィリピンで起こったことがありますね。でもで、圧力をかけて、それで軍隊が動いて、軍隊が2つに分かれちゃったりなんかして、アキノ大統領が就任したときなんかそうですね。

●クーデターの顛末

この20%の人たちは危機感を覚えて、大動員するんです。大動員したときの状況が全部テレビに残っているんです。それで国営テレビがあります。国営テレビはもちろん大統領側です。国営テレビがあつて、国営ではない民間のテレビは5局あります。5局全部反大統領です。国営テレビは1局で、それで「大統領は独裁だからクビにしろ」ということで大騒ぎをする。

ところがこの憲法の規定がなかなかうまく作ってある。「6年の大統領の任期のうち半分の任期を務めて初めて、リコールできる」と、「それまではリコールできない」と、任期の半分は安定政権。それで、外から見れば、一位の票が80%ぐらいの得票を取っていますから圧倒的多数でしょ。だから、安定、いろんなことができそうなんですね。

本格的に石油公団の総裁を変えるとか何とかで着手すると、これ、こちらの人たちが大変なんですね。だから「断固として反対」ということになります。それで、石油公団の人事に介入したときから国情が怪しくなつて、50万人のデモとかいうのが、起こってくるんです。それに対

してこちらは100万のデモで対抗すると、そういう激しい争いです。

最近のやつはそういう争いが起こったときに発砲して軍隊が出て発砲して死者を出したとなったら、死者を出した方が負けなんですね。政情不安定にしたということで、今度は誰が発砲したかが大問題なんですね。大体わかんないですね。それで、両方で報道合戦するでしょ。それで実際に起こったところ、圧倒的に5局の民間テレビの方が強いんですね。で、この前クーデターが起こったときには、国営放送が軍隊によって放送できないようにされて、完全に5局の報道陣が圧倒しているわけですね。それで結局大規模デモが首相官邸を取り巻いて、首相官邸になだれ込んで、この時に軍隊がいて、軍隊の人事権もチャベス大統領にあるはずなんだけど、軍隊が言うことを聞かないで、ここでクーデターは成功ということで、チャベス大統領は拉致監禁されますね。

それで、クーデターは成功したかのようだった。この段階でアメリカのブッシュ大統領は「暴力の国は終わった」という声明を出したりした。

ところがその2日後に今度は大統領支持派の大デモが起こって、それで軍隊も動揺して、結局大統領が生還するんです。普通は生還しないんですけどね。2日後に帰ってくるんですよ。この大統領は元軍人ですから、今も軍人の格好をしているんですよ。大統領として帰ってきて、クーデターは2日間で終わるんです。両方ともがデモでやっていて、デモでやっていて見えるところで、大衆の面前でクーデターが起こっている、クーデターというのはたいがい、裏側やるものですが、表でやってたから殺せなかったんだね、みんなの前で、だって、憲法があって、その憲法の下で合法的に選ばれた大統領を射殺したら、また、「射殺したのがケシカラン」という話になって駄目になるから、だから、しかも、軍隊出身だから支持している軍人がたくさんいるんだね。だからコッソリ携

携帯電話を渡したって言うんだ。携帯電話で情勢を。そして勝利できたというんです。

帰ってきたときになかなか演説がスマートで、「帰ってきた」と「これで怒って騒乱を起こしたら政府の負けになっちゃうから、おとなしくみんな家に帰って寝てください」と。「復讐するなんて考えないでください」ということで収まるんだけど、だけど、この両方が石油公団をどうするかということが大問題なんですよ。

●大衆の支持はどちらに？

そのことでまた長く騒乱が続くんですが、ホントにね、初めのうちは「チャベスという人は独裁者であって倒すべきだ」という論調、新聞の論調はそんな感じ。日本の新聞もそうです。ほとんどが、アメリカ系統ですから、うんとどぎつくはないけれども「チャベスは独裁者である。だから倒れる」。ところが、筋論から言ったらね、大統領は選挙で選ばれて、だから民主主義でないということでしょ。で、アメリカはデリケートですね。アメリカはやっぱり南米の人たちにも民主主義の運動はちゃんと気になりますから、武力で非合法のことをやったらそれは民主主義ではないと、だけど1回こっちが勝っちゃったものだから、ブッシュさんも元気になって、「暴力の大統領は追放された」と「大変結構なことだ」といったりするわけでしょ。

でもまた帰ってきちゃったんだね。帰ってきたら、つまり1回出来たクーデターが失敗したっていったら、大衆の支持がどっちにあったかってことが分かっちゃうでしょ。初めは90何%の支持率であってもだんだん支持率は減るのは普通だけど、1回失脚した大統領が帰ってきたものだから支持がすごいんですね。

今はどうなっているのかなあ？よく分かりませんが、その大統領の演説集が訳されているんです。『ベネズエラ革命』という本ですが、なかなか教育についての講演なんかも見事です。大衆の支持を得るということがすごく重要ですから、演説がうまいんです。

ある学校で演説してテレビで中継するんです。「諸君、数学は好きか？」と、高校生を自分の近くに置いて、聞きながら講演しているんだね。「数学は好きか？数学はできるか？何点だ？おおすごいなあ。数学は哲学だ。歴史だ。あれはすごいもんだ」という演説をするんです。それで、大体、「授業はたのしい」ということを前面に出すんだ。「歴史は好きか？」「好きです」「よかった」。だからね、数学は役立つとかいわないで、数学はたのしいから、あん中には哲学もあるし歴史もある。という演説をするんです。

で「役に立つから勉強しろ」とはいわない。「たのしいから勉強しろ」という雰囲気なんです。その中で2002年の12月から少数派が大デモをまた展開して、2003年の2月まで泥沼です。ゼネストですからね。経営者と組合がストライキをやるんですからね。つまりこっちは組合にも入れない貧乏人でしょ。組合に入るのは金持ちなんだ。で、これが合体して、経営者と組合がゼネスト、生産が止まっちゃうわけね。するとアメリカは困っちゃうんだ。うちの石油はどうなっちゃうのさ〜とで、アメリカは仲介に入っていますね。ある程度の力関係だどとまっちゃうからね、どっちも手を出さなくなるからね。

●周知の事実だけでその後の展開をどう予想するか

そういう状況で今は少し落ち着いていて、チャベスという人はなかなかファイトあって、革命を実現して行く。だから石油公団のトップをどんどんクビにしちゃうし、軍隊の将軍も裏切った将軍はみんなクビにしちゃうし、死刑にするというような派手なことはやってないで、軍籍を剥奪とかいう形でね。この騒動でもめているうちにチャベス政権の支持基盤が強くなったんじゃないかな？

じゃあ、アメリカももう短期でひっくり返そうということはあきらめているんですか？

もうあきらめている。そういうときにアメリカだけの報道を見てみると、まちがっちゃう。これはアイルランドのテレビ局がチャベスという人は面白い人だからということで密着取材をしていたんです。前から。革命の前から、そうしたらこんな事件が起こっちゃったから、だからすごいドキュメント、迫力があるドキュメンタリィです。

大衆動員をしながら、「民主主義というのに反したら負け」というルールがかなりはっきりしていて、アメリカも、びびっているわけだ。初めは表立って支持しなかったんだけど、勝ったもんだから気を許して、「今までの大統領は民主主義でなかった」っていったんだね。考えてみれば「大統領を罷免するときには本人の辞任だけによってやめる」という憲法の規定があるんですよ。「いなくなったら副大統領が代行する」という規定があるんです。副大統領はちゃんといるんです。いるのに勝手に、新しいクーデター政権ができちゃった。しかもクーデター政権の臨時大統領になった人は勝手にえぼっちゃって「国会解散」とか、「国会解散で選挙は年末に行う」と。4月に「年末に選挙する」って「その間どうするんだ？」ということになるんだけど、勝手に独走したもんだから今度は軍隊やいろんな連中が心配して「今度はチャベスの代わ

りにカルモナ大統領の独裁が始まりそうだ」っていうんで、そういうことがあって、チャベスの支援がまとまったり、そういうことがありました。

そういうことはすべての人が認める事実、例えばクーデターが起こって、クーデターの人たちが政見発表をして、それがつぶれたというようなことは全ての人認める事実でしょ。それからテレビでアメリカの大統領がなんといったかとか誰がなんといったかとかいうことも、周知の事実だね。周知の事実だけでその後の展開をどう予想するか。

独裁者であったなら、選挙のときは独裁者でなかったとしても、そのときに独裁者であったなら、それは復帰することはありません。復帰したという事実によって実験ですよ。「独裁者でなかった」ということです。つまり「支持基盤が違うだけだ」ということが分かって、そういう現代のこういう知識を整理しておこうということで、授業書的な話をしようというのです。

チャベスの政権が完全に安定するかというとなかなか難しい問題です。コロンビアのノーベル賞文学者が「二人のチャベス」という文章をこの騒動が起こる前に書いています。「チャベスという人はすごい英雄だ、とあるいは独裁者だ、と、どっちだかわからない」と、ちょっとまかり間違うとおかしな方向にいつっちゃうかもしれない。今のところは視野が広くていいみたいですが、ぼくとしてはチャベスを全面的に支持するわけにはいきません。だから逆に客観的に書けるような感じがします。